

『最も重要な掟』

聖書 マタイによる福音書 22 章 34～40 節 讃美歌 120 280

説教 森田幸男牧師

ただ今読みましたところには、「聖書の教えのなかで最も重要なものは何か」という事が示されております。一人の律法の専門家が、つまり人々に神の教えを教えるユダヤ教の教師がイエス様を試して質問したわけです。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」と。この問いにイエスさまは答えられました。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」と。

今読みました最後の 40 節に、「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」とあるのですが、「律法全体と預言者」というのは、いわゆる旧約聖書を指しているのです。今日の箇所に記載されているこの律法の専門家とイエス様との問答がなされているところを今読んでおりますが、この問答がなされた時にはこのマタイによる福音書はまだなかったわけです。その時にあった聖書というのは、ユダヤ教徒にとっての聖書、私たちが旧約聖書と言っているものしかありませんでした。そのことを「律法全体と預言者」と言っているわけです。聖書に書かれてあるいろいろな神様の教えというものは、この二つの教えに基づいている。この二つのことからその他の様々な教えは全部出ているのです。ですからこの二つのこと、つまり、「心を尽くして神様を愛すること」と、「隣人を自分のように愛すること」、この二つが聖書の教え、神様の教えの最も大事なことであって、この二つのことからその他のすべての教えは出ているのですと、イエス様は言われるのです。

私たちが今読んでおまして、聖書はこんな分厚いものですから、聖書の教えというものを整理して、私たちが身につけるために「信仰問答」とか「教理問答」というものが教会の歴史の中で生まれて来ました。今日の箇所は正にその「信仰問答」「教理問答」の原型のようなものですね。律法の専門家が聞いて、イエス様がそれに答えている形になっています。それで今日のところは、言い換えれば、「聖書の教えの中心は何でしょうか。」或いは、「キリスト教の信仰の一番の勘所は何でしょうか。」という問いとしてこれを見ることができると思います。そして私たちがここに簡明に記載されていることを本当に心得て、それを生きていくところに私たちの信仰の道がある。そこに私たちが本当に生き生きと生きることが出来る道があると、そういうことになると思います。

私たちは今、この問答そのものを離れて、これは聖書に書いてあることですがイエス様の生涯とその教えというものは何だろうかと考えてみる時に、イエス様という方はどう生

きられたかということ、本当にここにあるように、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、神様を愛する。」そのように生きられたということが福音書を読むとわかります。それはイエス様がしばしば人々から離れて、弟子たちからも離れて、一人でお祈りされたことが記されています。それはイエス様が心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、神様を愛された姿だと思ふのです。そしてこれが最も重要な第一の掟である。もう一つはこれと同じように重要である。「隣人を自分のように愛する。」「隣人を自分のように愛するとはどういうことですか」というと、「それはイエス様がなされたように生きることです」と答えることができますと思います。ですからイエス様の生涯というのは、神様を愛することと、隣人を自分のように愛すること、この二言でイエス様の生涯を要約することが出来ると思います。それは具体的にどういうことかということ、私たちはこの聖書をひもといていかなければいけないということになると思うのですが、しかしイエス様の人生の要点というのは、神への愛と、人への愛、それに尽きると思ふます。

これは実に見事な答えですが、先ほどここに信仰問答の原型があると申しましたけれども、これは実際そうだったのです。これはイエス様がある意味では難しい質問をされたと言ってもいいのですが、それに対して本当にびたっとお答えになりました。これはイエス様だからできると私たちは思うかもしれませんが、ユダヤ人ならば全ての人が、子供でさえ、イエス様が答えられたように答えることができるわけです。と申しますのは、イエス様が十字架で亡くなられる最後の時にお祈りされた言葉というのがありました。それは、「父よ。わが霊を御手にゆだねます」とこう言って息を引き取られたということでありました。これは本当にすばらしい祈りなのですが、これはイスラエルの人たち、ユダヤ人たちが自分の子に最初に教えたお祈りです。子供が言葉を話すようになるのは、2歳過ぎた頃でしょうか、いや、言葉を覚える前に、母親は添い寝をしながら、「主よ、わが霊を御手にゆだねます」という祈りをささげて子供を寝かしつけたことでしょうか。これは朝のお祈りであり夕べのお祈りで、毎日のことです。これ以上のお祈りは人間には出来ないと思うのです。それと同じように、子供がもう少し大きくなっていろんな言葉が覚えられるようになった時に最初にユダヤ人が教える聖書の言葉が、この「心を尽くし、精神を尽くし、思いをつくして、あなたの神である主を愛しなさい」という御言葉です。これがユダヤ人が最初に覚える聖句なんです。先ほどの、「主よ、わが霊を御手に委ねます」というのは聖書の詩篇 31 篇の 6 節にある言葉ですから、これも聖句を暗誦して自分の日々のお祈りにしたわけですが、最初に覚えた聖書の教えの箇所が、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」という言葉でした。これは旧約聖書の申命記 6 章 5 節にある言葉です。4 節から読みますと、「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」このようにあります。この箇所を「シエマー」と言います。「シエマー」とは「聞け」というヘブル語です。私たちの讃美歌の場合は番号がついていますから、私たちは何番と言ってそこを開くのですが、外国では番号ではなくてその讃美歌の一番の歌詞の冒頭

の言葉が出て、開くこともあります。そのように、ここの部分は「聞け(シエマー)、イスラエル」となっています。「シエマー」と言うと、その後が続くこの言葉ということになるわけです。ですからこれはイエス様も勿論ユダヤ人ですけれども、小さな子供であろうが誰であろうが、「律法の中でどの掟が最も重要ですか」と質問されたら、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神がある主を愛しなさい」と皆答えられたのです。そういうことで、これはユダヤ人にとっては最も日常的な言葉でした。彼らは朝に夕に、ここだけではなくて、ここを含んで申命記6章1～15節などを唱えるわけです。そして礼拝の最初にもこれが唱えられるわけですから、彼らにとってはこれ以上日常的な聖書の教えはなかったわけです。

ですからここで、ファリサイ派の律法の専門家はイエス様を試して、やっつけようと思っているのですが、イエス様は子供のように暗誦していることを素直に答えているのです。こう答えながらイエス様は、逆にこの律法の専門家に問うているのです。「聖書の教え、神様の教えはこれです。私たちはそれを毎日唱えています。そしてわたしはこれを大事にして生きていますけれども、わたしに質問なさるあなたはそれをそのように生きておられますか」と、ここではそのように反問したとは書いてありませんが、本当にこの神の教えを生きているだろうか、そういうことをイエス様はその生活、言動をもって当時の人々に問われたのです。そしてそのようなイエス様の言動が当時の指導者たちにとっては、むしろ神の教えを破るもののように思えたのですが、それは逆で、本当に子供でも答えることが出来る教え、そして毎日唱えている教えを、本当にそのように生きているだろうか。つまり、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、神様を愛する。」これもすぐに覚えられますね。でもこれを生きるということは、難しいとかいうだけではなくて、本当に深く広い中身になると思うのです。そしてもう一つの、「隣人を自分のように愛しなさい」というこれはレビ記19章18節の言葉です。これも私たちは覚えているのですが、「隣人を自分のように愛する」ということは、これも一度聞いたら覚えられますけれども、これを本当に教えの通りに生きるということになると、これも限りなく広く、深くなっていくわけであります。

それでこの二つの教えについては他のところでも出てくるのですが、実は「善いサマリヤ人のたとえ」というのがルカによる福音書10章25節以下にあります(126頁)。「すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。『先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。』(同じような状況ですが、質問の言葉は変わっているのです。)イエスが、『律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか』と言われると、(ここでイエス様は答えないで、逆に律法の専門家に答えさせるわけです。子供の頃から暗誦して毎日唱えているのですから、知らないとは言えないのです。)彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』、また、『隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。『正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。』」このように書い

てあります。その最後にイエス様が、「それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」
このようにおっしゃっています。

私たち生活していると、時々、倦怠感というか、目標を失うような時がありますね。どういふふうにしていいかわからない。どう生きていったらいいかわからないというふうなことが個人生活でも教会のことで、この国のあり方でも、しばしば起こりますね。その時にこれが答えになると思うのですね。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい」とあります。イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」ユダヤ人なら暗誦していない人はいないわけです。大事なのをそれを実行することなのです。そうしたら命が得られます。

私たちも聖書の大事な教えを実行する。生きる。心を尽くす。精神を尽くす。思いを尽くす。力を尽くす。そして隣人を自分のように愛する。これは、私たちは覚えていますけれども殆ど実行していないのです。そこにすべての問題の根源があると思います。人生のいろんな問題があって、そこを突破したいと思ったら、この教えを本当に実行することを試みる。するとそこに私たちのすることは無限にあるのです。この二つのことを実行するというのは、限りなく、深く、遠くまで為していくことなんですね。自分のすぐ隣りの家族であったり、職場の同僚であったり、そこで出会う人も隣人ですね。問題を持たないで生きている人はこの世に一人もいないのです。そういうことを知るだけでも愛は深まります。私たちは自分のことはある程度分かっていますが、隣りの人のことは殆ど知らないことが多いのです。それを自分のように隣人を愛するとなれば、隣りの人のことを思い遣って、先ず知ることをしてあげないといけなのです。思い遣ることを実際に始めたら本当に人間関係が変わるのです。生活が変わるのです。そして問題が解決に向うのです。

そういうことで、わたしたちも、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」というこの聖書の最も大事な教えを覚え、これを自分なりに、家庭でも、職場でも、社会問題の中でも、国際状況の中でも、これを実行する。その実践を深めて行く。その時そこに命が湧き出てきます。命の大切さが滲み出てきます。これが聖書の教えであります。

お祈りいたします。

神様。あなたは本当に私たちを限りなく顧みて、愛しててくださいます。どうかそのことを私たちが覚えて、そしてまたそのようにあなたが愛してくださるようにならなすように私たちもあなたを愛し、また、隣人を愛することができますように、そして共に一層あなたの祝福にあずかることができますようにお導きください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン